

Voice of Handball

Vol.113

久保 弘毅

PROFILE 1971年生まれ。アナウンサー時代にハンドボール中継に携わり、8年連続でプレーオフ男子決勝を実況。その後フリーのスポーツライターとなり、ハンドボールやアマチュア野球などの取材を続けている。

送球の昂 花菖蒲編



～櫛田亮介、 三重バイオレットアイリスを率いる～

北陸電力でDFの要としてプレーしていた櫛田亮介が突然の転身。三重バイオレットアイリスの監督に就任後、すぐに迎えた全日本社会人選手権を彼と選手たちはいかに戦ったのか。

勝利と運営の二兎を追う

だれもが驚く転身だった。北陸電力でプレーしていた櫛田亮介は昨季限りで同チームを退団し、この春から女子の三重バイオレットアイリスの監督に就任した。

櫛田は2007年、ドイツ3部でのプレー中に左ヒザの大ケガに見舞われ、その後約2年間のリハビリの末に、日本で競技復帰を果たした。北陸電力の社外選手として自分自身でスポンサーや仕事を探しながらプレーを続ける姿は、日本のアスリートの新しいあり方とも言われていた。ケガから復帰してからは年々パフォーマンスが向上し、37才にしてトレーニングで自己ベストを更新す

るなど、現役へのこだわりは衰えていないように見えた。

なぜ北陸電力を退団して、三重の監督になったのか。榎田は言葉を選びながら、心境の変化を語った。

「左ヒザのケガをしてからは、とくに同世代の方々の期待を感じながら競技を続けてきましたし、僕自身も選手へのこだわりは持っていました。まだ選手でもやれたし、身体が痛いとかもなかったんですけど、『ただ選手を続けるだけでいいの？』という疑問がここ数年あったんですよ。口では『トップをめざす』『オリンピックに出たい』と言っているけど、実際はどうなのか。

ハンドボールマンとして東京オリンピックに本気でチャレンジすることを考えたら、スタッフで日本代表に食い込んでいく可能性もあるんじゃないかと考えていた時に、バイオレットから話があった。チームといっしょに強くなっていけたら、そういう道も見えてくるのかなと思っ

て方向転換をしました」
監督のオフアワーがあったのは1月末。3月上旬の日本リーグ終了後に

結論を出し、今までやってきた相続診断士の仕事などの引き継ぎを済ませて、5月から本格的にチームを見るようになった。

監督業と並行して、日中は理事としてクラブの運営にも携わる。「自分の給料は営業活動で取ってくる」意気込みでスポンサー回りをしている。勝利と運営、2つの命題を託されての新たなスタートだった。

「二兎追うものは」と言われそうですけど、僕が見る限り、勝利と運営、どっちも追いかけないと根本的な解決にならないと思いました。個人で6年間、スポンサーを取りながらやっていたのが、今度はクラブチームの舵取りができる立ち位置になりました。責任は重いですね」
個人で身を立ててきたノウハウは、クラブチームの運営にも必ず生かせる——信念を持って活動を続けてきた榎田にふさわしいポジションが巡ってきた。

文化を作る1年

榎田が監督に就任してから、ミ

ティングの形が大きく変わった。まずハンドボールをセットOF・バックチェック（戻り）・セットDF・速攻の4つの局面に整理して、それぞれについて選手たちに考えさせるようにした。考える

時間は2〜3分。気づいたことは3〜4人の小グループごとに議論して発表し、全体で共有し合う。最初はぎこちなかったが、飲み物とお菓子を用意して雰囲気を作っていくうちに、高校を卒業して間もない若手や、ケガで試合に出られない選手からも意見が出てくるようになった。

「自分たちで話せる場をこつちが提供しているだけです」と榎田は言う。大枠は監督が決めるが、細部に關しては選手たちに任せて、出てきたものをまた監督が吸い上げ、整理していく。この繰り返しで選手間のコミュニケーションが自然に生まれできたし、選手が思ったことを整理して伝えられるようになった。キャプテンの漆畑美沙は「さわや



毎試合声が枯れるまで、ベンチから声を出し続ける

かに気持ちを伝える方法が見つかった」と表現していた。以前の三重は、うまくいかないときに人のせいにして、「これをしてよ!」と一方的に要求するような発言が多かった。しかし、今では相手を尊重し、相手に求める前に、自分になができるかを考えるようになったという。

榎田も選手たちを認めて、いいところがあったら大げさなくらいにほめる。長年負け続けて、自分自身を否定することに慣れ切っていた選手たちには「認めてもらえる喜び」があった。

またクラブの歴史にも敬意を払うよう、榎田は訴えかけた。漆畑も榎田の意図をくみ取り、OGたちに声をかけている。

「勝てなかった時代にも先輩たちがぐっとこらえて三重を残してくれたから、今、私たちが輝ける。だからいつでも応援に来てくださいいね。体育館にも足を運んでくださいいね。そういう心が三重に一番足りなかった部分かもしれません」

三重は日本リーグに加盟した2006年当初「3年でプレーオフ、5年で日本一」を目標に掲げていた。しかし思うように強化が進まず、9年間で一度もプレーオフに出ていない。そういった三重の歴史的背景も踏まえて、榎田は選手たちにこう伝えた。

「クラブとしては2021年の三重国体優勝が1つの目標だけど、そこでクラブが終わるわけでもないし、ハンドボールがなくなるわけでもない。ただ、今のメンバーに『三重国体だけを見据えて』なんて言えない。だから今年1年をいかに充実させるかを考えてほしい。この1年で引退するとしても、三重が変化した2015年の一員だったと、胸を張って次のステージに進んでいける人間になってほしい」

チームとして、また人として立ち戻る場所を作ることから、榎田は着手した。2015年は「三重バイオレットアイリス」の文化を作る1年となりそうだ。

創部初の3位

榎田「監督」のデビュー戦となったのが、5月の全日本社会人選手権。目標設定に榎田は細心の注意を払った。

「めざすのはもちろん優勝だけけど、そのためには決勝トーナメントに進出する必要があります。決勝トーナメントに行くには最低でも勝点1が必要だから、まずは初戦の北國銀行戦をロースコアで勝つ戦いに持っていく。得失点差もあるから、たとえ負けてもなるべく離されないようにして、次のソニーセミコンダクタ戦で勝点を取れば、リーグ2位で決勝トーナメントに進めて、優勝の可能性が残ります」

初戦の北國戦は14-31で完敗。だが翌日にソニーが北國に19-38で敗れたため、得失点差で三重が優位に



選手同士で話し合う場面が増えた

立った。

続くソニー戦では、序盤から攻撃が機能した。セットOFF、2次速攻ともに上手にポストを絡めて得点を伸ばした。とくにルーキー河嶋英里の切るタイミングが素晴らしく、全員が連動して数的優位を作り出した。33-23。榎田は「こんなに点が取れるとは」と驚きながら、就任以降のアプローチを語った。

「4月の早い段階でプラス1アタック（1人余らせる攻撃）をかみ砕いて説明して、僕が福井に戻って

いた間も練習の動画を毎日チェックしてきました。以前はフォーマーシオンに頼りがちでしたけど、彼女たちの中で整理ができたから、だれが入ってもポストの位置を見て攻められるようになったんだと思います。同じきっかけの動きでも、ポストの位置が変わると違う展開になりますよね。そこをずっとやってきました」

榎田が口出したしたのは、後半途中でソニーがプレスDFに切り替えた時だけ。それ以外は選手たちで攻撃を組み立てた。

「正直、こつちが我慢していると、ころも多いんですけど、自分たちで自己解決できるようになってほしいから、なるべく口出しは控えました。『この人はあまりやってくれないな』と思っている子もいるかもしれない。『引き出してくれているな』と感じていたらいいんですけどね」
あえて余白を残しておくことは、これまでの仕事や「夢先生」（注）の授業などから得たノウハウだった。動画でチェックするやり方は、滋賀医大のスポットコーチをしていた時

注：日本サッカー協会が実施している社会貢献活動「JFA こころのプロジェクト」の一環



榎田「監督」の記念すべき初勝利。2015年5月22日ソニーセミコンダクタ戦（富山市総合体育館）

の経験が役立った。
準決勝ではオムロンに大差で敗れたが、3位決定戦では香川銀行T・Hに22-20で競り勝ち、三重は創部以来初の3位入賞を果たした。3位

決定戦では攻守の要・原希美が開始12分で2度目の退場になるアクシデントがあったが、浮足立つこともなく、オーソドックスな6:0DFで60分間守り抜いた。

原は「となりにいる万谷（由衣）さんがフォロワーしてくれたんで、後半は退場を怖がらずに思い切りやれました」と笑顔を見せた。万谷も「原が早い段階で2度退場になったのは予想外でしたけど、原がもう退場できないから、自分の方に（相手を手を）持ってくるよう話しました」と振り返った。GKの山根エレナは「ここに持っていこう」というDFの意図がわかるので、シュートが見やすかったです」とDF陣をほめ称えた。

互いを思いやり、共通理解を持つプレーをすれば、想定外の事態でも乗り越えられる。個々のコメントからもチームの成熟が感じられた。終盤の時間の使い方も心憎かった。ゆっくりと時間を使って攻撃し、

バックチェックを徹底。リバウンドには漆畑が率先して飛びつく。残り1分の戦いは、かつて榎田が所属していた本田技研（現HONDA）の黄金期を見ているようだった。残り何分何点差を想定したミニ

ゲームは、榎田が監督になってから毎日のようにやってきた。選手たちは「練習の成果が出ました」と口を揃える。キャプテンの漆畑は言う。

「うまくいかない時間帯でも、どこに立ち戻るかをコート上で表現できました。これはバイオレットにとって大きな成長だと思います。今までは巡ってきたチャンスにびびっていたのを、自分たちからチャンスをつかみ獲れるようになったのは大きいです」

後半の大事な場面で右サイドから決めた池原も言う。



万谷（写真）をはじめ、選手たちがいい表情でプレーするようになった

「以前はみんなピリピリしていたけど、榎田さんが入ってきたことでチームが明るくなったというか、みんな笑顔になりました。それでいて、今までだったらやられていた場面でも、我慢強く集中力を保てました」

新たな指揮官のもと、三重バイオレットアイリスは大きく変わろうとしている。企業チームよりも練習時間が短いハンデはあるが、明るく活発なチームカラーが根づいてきた。三重でプレーする15人に、榎田は励ましの言葉を送る。

「みんなはトップリーガーだから、自分の発言、打ったシュート、食べたご飯、子どもたちに伝えたこと、すべてが日本のハンドボールやスポーツの未来を担っていると思ってやろう。それってだれにでもできることではないから、いい意味でエネルギーにしてがんばっていきましょう」